

アメリカ経済史・最終講義 「H. L. ミッチェルと南部小作農組合 (STFU)」<sup>\*1</sup>

秋元 英一

## ニューディール研究へ

じつは最終講義というのは、私は初めてでありまして、どうやったらいいかと考えております。アメリカ経済史の最終講義ということで、いったいミッチェルとか、Southern Tenant Farmers Union とはいったい何か、と思われるかもしれませんが、教科書2冊<sup>\*2</sup>の中にはミッチェルとか南部小作農組合という言葉はあります。しかし、本を読んだくらいでは、たぶんその実態はおわかりいただけないのではないかと思います。

最近、『ニューヨーク・タイムズ』のweb版を読みましたら、こういう論説がありました<sup>\*3</sup>。最近、民主党の大統領候補で(バラク・)オバマさんとヒラリー(・クリントン)さんが優勢であるという話ですが、両方ともマイノリティの立場から大統領をめざしている。オバマさんは黒人<sup>\*4</sup>の代表として、ヒラリーは女性の立場からです。黒人や女性で大統領になった人は今までアメリカにおりません。(むしろ、この2人が黒人であるから、女性であるから、あるいは、それぞれそうした黒人や女性の利害を代弁するために大統領候補になったとは言えませんが)。この論説は、さらに進んで、ではない、女性と黒人はいつ選挙権を獲得したか、と問いかけます。

黒人は南北戦争後に身分が奴隷から解放され、選挙権も白人男性と同じに与えられたのです。それは1870年のことです。ただ、その後の南部の黒人たちがその参政権をきちんと行使できたかという、そうではなかった。だが、とにかく、黒人の参政権は19世紀の後半に取得されているわけです。では、女性はどうかという、アメリカで女性に参政権が認められたのは、ずっとあとの第一次大戦後の1920年です。

この論説は、黒人と女性のうちで、マイノリティ度がひどいのは、むしろ女性である、としています。女性のほうがはるかに政治に参画する度合いが小さいと主張しています。まあしかし、ようやくアメリカの政治にも光がさしはじめてきたことはたしかです。ブッシュ政権は8年間にあまりにも無茶苦茶なことをやったので、それを修正するには、オバマが2期8年間、ヒラリーが2期8年間、あわせて16年間くらい大統領をやらないと元に戻らない、というのがこの論説の主張です。

ところで、今現在、大統領選挙の前哨戦ということで、いろいろな陣営でいろいろな形の運動が行われています。日本とどう違うかなという観点で見ていると、ふつうの人が結構たくさん自由に参

---

\*1 本稿は、2008年1月15日、千葉大学における最終講義をもとに、必要な修正やデータの補充を行ったものです。行論でふれられているさまざまな歴史事象についての詳しい話は、秋元『ニューディールとアメリカ資本主義』その他をご覧ください。

\*2 秋元『アメリカ経済の歴史、1492-1993』(東京大学出版会、1995年)；秋元・菅英輝『アメリカ20世紀史』(東京大学出版会、2003年)。

\*3 Gloria Steinem, "Women Are Never Front-Runners," January 8, 2008. [http://www.nytimes.com/2008/01/08/opinion/08steinem.html?\\_r=1&pagewanted=all&oref=slogin](http://www.nytimes.com/2008/01/08/opinion/08steinem.html?_r=1&pagewanted=all&oref=slogin)

\*4 黒人(black)という言葉は最近ポピュラーでなくなっています。正確には、African-American といえます。

加できる、ふつうの人が地位とか、そういうことなしに、(日本でも勝手連なんていうのがありました)政治に参加してそれを支えていくというスタイルは、アメリカではグラスルーツ(grassroots)と言います。それに democracy を加えると、「草の根民主主義」ということになります。

この民主主義という言葉をめったやたらに使う政治家がいます。言わずと知れたブッシュ大統領です。彼が言っている民主主義は「押しつける民主主義」です。イラクとかへ行って「これ民主主義だよ。おまえ、これやれ」というわけです。これはアメリカ本来の民主主義ではありません。草の根の運動にもとづいた民主主義ではないのです。私に関心を持ったのは、この点です。つまり、究極のところ、政治や歴史を動かしていくのは、下からの力ではないか、という点です。

私は東京大学経済学部の学部の頃、関口(尚志)先生<sup>\*5</sup> という先生のゼミに入りました。なぜ、そこに入ったかという、その当時先生は、「ナチスとニューディール」という研究テーマで学生を募集していたからです。私は最初ナチスのことを勉強しました。学部3・4年の頃、ドイツ語を読んで、ナチスがどういう政策を行っていたか、どのように戦争に進んでいったか、といったことを研究しはじめたのです。東大の大学院に進むには、大学院の内部審査というのがありまして、そのために、私は「ナチスの労働政策」という論文を書きました。大学院に入るか入らないかの頃、さて、ドイツとアメリカとどちらを研究対象にすべきか、考えました。もともと私は中学の頃から英語が好きでした。ところがドイツ語は大学に入ってから始めて習って、あまり勉強しなかったのだからかなり悪い成績をつけられた時もあります。それで、英語とドイツ語を比較すると、同じ時間に英語ならドイツ語の数倍の本を読めると思ったのです。それで、アメリカ研究なら、英語が主ですから、いいのではないかと考えました。最初、ニューディールをやろうと考えました。修士課程では、関口尚志先生のほかに、その当時東大社会科学研究所におられたアメリカ経済史の専門家鈴木圭介<sup>\*6</sup> 先生にも師事しました。そして本文、注、図表あわせて約400枚の修士論文を書き上げました。そして博士課程に進学したわけですが、その年、1968年に東大紛争が起きました。経済学研究科の大学院(自治会)はストライキに突入り、安田講堂占拠に参加したこともあり、救援対策も含めて約2年間研究が中断されました。東大当局は当時の院生全員留年という措置を決めたので、通常なら3年間で修了するところを最短で4年かかったわけです。

私が大学院博士課程を修了したのが1972年3月、非常に幸運なことにその4月から横浜の関東学院大学で講師となることができました。関東学院大学は当時一橋大学(大学院修了)の先生方を多くスタッフに抱えており、その中に、アメリカ経済史研究で非常に幅広い研究をされていた小原敬士<sup>\*7</sup> 先生がいました。まだ、関東学院の話がなかった頃、世界産業労働者同盟(IWW)

\*5 関口尚志(1932-)は大塚久雄の一番弟子ということで、有名でした。専門は当初イギリス金融史、比較金融史研究会という研究会を山之内靖と共に主催していました。ファシズム研究としては、「ドイツ革命とファシズム』『経済学論集』や北一輝研究でもある「危機の意識と日本型ファシズムの経済思想」長幸男他編『日本経済思想史』などが有名。

\*6 鈴木圭介は都留重人と同学年で、日本の西洋経済史研究ではなかなか学者に恵まれないアメリカ経済史研究をその初期において長く1人で支えた。『アメリカ経済史』I、IIが編著として有名である。

\*7 小原敬士(1903-1972)は、著書、翻訳書共に非常に多く、その領域は、経済史、経済思想史、現状分析から経済地理学にも及んでいる。『ニューディールの社会経済史』という本もある。

についての研究ノートを書き上げたので、抜刷を小原敬士先生にも送りました。葉書の返事をいただいたことを覚えています。就職が決まってからは小原先生に指導いただくのを楽しみにしておりました。ところが、小原先生は、私の就職と前後して突然なくなられたのです。追悼の会を関東学院でやったときに、津田塾大の長沼先生がメインのスピーチをされたのを覚えています。

### 『綿畑からの叫び』との邂逅



さて、関東学院大学に入ってから、ニューディール研究を続けたのですが、その頃読んだ本の中に、グラブス (Donald H. Grubbs) という学者の本 (*Cry from the Cotton: The Southern Tenant Farmers' Union and the New Deal* The University of North Carolina Press, 1971) があります。この本はその副題にあるように、南部小作農組合とニューディールというテーマを扱っております。この『綿畑からの叫び』という本は論点が非常に魅力的でした。それはどういふことかと申しますと、ニューディールが農業政策 (とくに、農

＜グラブス教授＞

業調整法 AAA) として実践されることによって、南部の小作人や農業労働者の状態が悪化したのだ、ということです。もともと、フランクリン・ローズヴェルトによって開始されたニューディールは恐慌下のアメリカ国民をその窮状から救い、飢えから救い、手当を与え、職を与えた、いわば救世主のような役割を評価されてきました。失業対策しかり、銀行救済しかり、農業救済も、労働政策もそうである、という具合に、です。この本はそうした見解に対して異議を唱えたわけです。むろん、ニューディールが南部に対して悪いことばかりやっていたというわけではありません。ただ、明らかになったことは、大恐慌が起きただけでは、南部の綿作プランテーションにおける地主－小作関係に大きな変動は起きなかった、ということです。

ちなみに、グラブス教授の本書は、南部小作農組合の、半ば公式的な記録であると見なされています。私は、本書を読み終わったあとで、著者に手紙を書きました。(関東学院大学に就職して、最初に購入した備品がオリベッティのタイプライターでした。レッテラ 32 とかいう名前がついていたと思います。最初のうち、家内のほうが大学の研究室で秘書をしていたこともあり、タイプがうまかったので、いつも清書をしてもらっていました)。著者からはなかなか格調の高い手紙の返事が来ました。それは資料の中に綴じてあります。以下に全文を訳出してみます。日付は 1974 年 4 月 7 日です。

秋元教授:

南部小作農組合についてアメリカ合衆国以外のところに関心をお持ちの人がいるというのは、私としては大変嬉しいことです。工業化と都市化の問題は世界大に起きているもので、各国の経験がどう関連するかについてはより多くの研究がなされる必要があります。チュービンゲン大学のカール・エーリッヒ・ボルン博士の指導のもとで百科事典(『工業化時代の経済と社会』)が編集されていますが、そこには、1750 年以降の工業化諸国の主要な社会的、経済的諸制度につい

ての論文が含まれるはずで、あなたはバリントン・ムーアの『独裁と民主政治の社会的起源』<sup>\*8</sup>という書物をご存じかも知れませんが、それは多くの国における発展の比較的研究を行っています。もしもあなたが、南部小作農組合の経験が日本における地主-小作関係とどう比較可能であるかについておしえてくだされば、私は大変ありがたいのです。ひとつの日米の相互交流がすでに起きています。第二次大戦後、南部小作農組合は全米農業労働組合(National Farm Labor Union)に変わり、カリフォルニア州の工業化した農場の労働者を組織しようとしてきました。その指導的なオーガナイザーであるハंक・ヘイジワーは、ダグラス・マッカーサー将軍が日本で農地改革を行っているのを見て学んだ教訓をカリフォルニアに適用しようとしたのです。

私は、前の STFU の指導者で現在は大学で頻繁に講演をしまわっている、H.L.ミッチェルに、彼があなたの質問に詳細に答えることができるか、尋ねてみます。私は、私の本の射程を越えて考えてみたいと思います。

1) STFU は、南部プランテーション制度がすでに集産的だと主張していた。多くの仕事が数多くの農業労働者によって共同で行われ、ただ、仕事の半分は地主の役目です。農場保障局(FSA)を通じて1937年以降、土地が連邦政府によって買い上げられ、1つの農場単位として働く訓練を受け、グループとして事実上所有権を与えられるような小作人やシェアロッパーに貸し出されることとなります。FSA は多くの協同組合の実験を開始しました。STFU も協同農場を自ら設立しました。しかしながら、政府の政策は「民主主義のための戦争」のあいだこれらに敵対的となり、FSA とその協同組合はしだいに個人所有農場に解体されていきます。

2) STFU の究極のヴィジョンは、社会主義のみならずキリスト教によっても大きく影響されたため、「土地なき者に土地を」というスローガンのような単純なものだったとも言えます。人々は、個人個人の競争者としてでなく協同して兄弟として土地を所有して耕作すべきであるというのです。というのも、さもないと、抜け目なく貪欲な連中がほかの人々をふたたび閉め出すことになるからです。STFU の指導者たちは明らかに農業生産者の組合は世界大でなくてはならないことを知っていました。しかし、それらは反共産主義的でなくてはならない、なぜなら、管理が人々自身の手にあるべきだし、彼らは上から指令するようないかなるエリートも、あるいは「前衛」も信用していなかったからです。

日本の経験に照らして、あなた自身の結論を教えてください。

グラブス教授は、非常に広大な構想をこの短い手紙の中に凝縮して書いていたわけです。世の中が工業化し、都市化する過程における下層階級の問題としてこれを捉えたい、ということですね。その優れた前例としてバリントン・ムーアの有名な著作が引用されています。ここでグラブス教授は比較史という方法の大切さを指摘しています。たとえば、南部小作農組合と日本の地主小作関係、あるいは小作闘争の関係がわかれば、彼としてはありがたいと書いています。

---

\*8 Barrington Moore, Jr., *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*. 1966; 宮崎隆次他訳『独裁と民主政治の社会的起源』I、II、岩波書店、1986-87年。

## ミッチェルとの出遭い

さらに彼は、必要ならミッチェル(Harry Leland Mitchell, 1906-1989)に連絡して直接秋元にコンタクトさせようとしています。その後、ミッチェルからは私宛にたくさんの手紙が届くようになりました。その中にはダイレクトメールも多く含まれていました。ミッチェルはその頃商売をやっていました。STFU という団体は非常に良く文書や手紙類を保存していました。そのオリジナルはノース・カロライナ大学チャペル・ヒル校の図書館の南部史コレクション(Southern Historical Collection)にあります。同時にこの文書集はマイクロフィルムにされました。それは当時 Microfilming Corporation of America という会社を通じて販売されていました。ミッチェルはこの会社のエージェントのようなことをしていて、南部史の学会などがあるたびにブースを設けて販促につとめていたと思います。そして、それ以外に、アメリカの色々な大学を回って講演をしていたわけです。ミッチェルはこの会社からコミッションを受け取っていたので、利益をあげていたかもしれませんが、その利益は自分のためでなく、昔の闘争の仲間の生活をサポートするためなどに使われていたようです。

ここには、私がアメリカに行く前の 1975 年 9 月 11 日にミッチェルから来た手紙を綴じてあるので、それを訳出してみます。

秋元様：

9 月 4 日の良い手紙をありがとう。私はあなたがノース・カロライナ大学チャペル・ヒル校のティンダル教授から手紙をもらったと聞いてうれしく思います。あなたが彼の大学に行って研究することを承諾してくれたのは、助かると思います。

私は「イーजीライダー」という映画を見ていません。ハリウッドは時々人生のある局面を描写した映画を作りますが、しばしば映画は非現実的です。

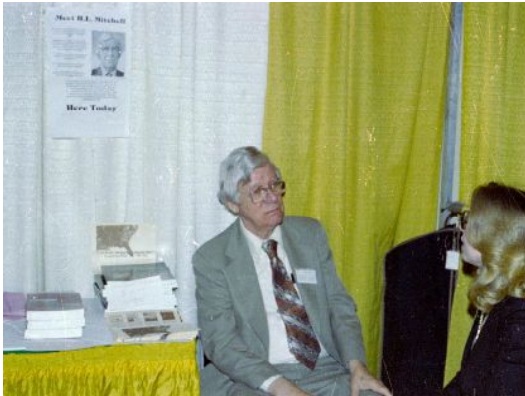
私はここ1年ほどチャペル・ヒルに行ったり来たりしています。われわれのペーパーがマイクロフィルム化されていたからです。あそこで生活上私が最も危険だと思うことは、たくさんの小さい自動車や自転車が走っていることです。ある時、私はワシントンまで行進して政府にヴェトナム戦争をやめさせようとしていると主張する一団の学生たちに会いました。私は彼らに抗議をするのは結構だが、非暴力でやってくれと忠告しました。また、彼らに交通をブロックしないように忠告もしました。彼らは交通遮断をこころみ、それによって政府の被雇用者たちが彼らに頭にきたのです。2年後に、チャペル・ヒルから行ったその集団のリーダーの1人に会ったのですが、その頃には彼はビンガムトンのニューヨーク州立大学教授でした。彼は私の忠告を思い出し、私が両方について正しかったと言いました。

昨日、あなたの年齢くらいの青年がやってきて、われわれは彼がアクティブに参画した 1960 年代の公民権運動以降、人々のあいだに何が起きたのかについて議論していました。彼はあの運動に大きな希望と高邁な理想をもって臨んだのです。黒人たちはたしかに一定の進歩をしました。彼らは今や黒人であることもある政治家に投票できる、しかしながら圧倒的多数の人々にとって経済的状況は大きく改善してはいません。

わが国の青年たちの多くは、仕事を見つけれず、麻薬に入り浸ったり、個人的な暴力に訴える。しかしながら、そういう人は少数派で、2千年ものあいだ安定した政府があるあなたの国でも、同じようなことをする少数の人がいるのだらうと想像します。

私は、私の能力の限界まで、私が接触できる人々に対して、この信念、つまり政治的民主主義のみならず、経済的民主主義にもとづいたよりよい世界がありうるという信念を教え込みたいと思います。

あなたからふたたび手紙をもらうことを楽しみにしています。あまり何ヶ月も経たないうちにあなたがあなたの研究のために、アメリカ合衆国に来られることを臨んでいます。



私が最初にノース・カロライナ大学に留学したときも、せっかく秋元が来ているのだから、行ってやろうということで、ミッチェルはチャペル・ヒルにやってきました。講演のときにミッチェルは、最初にアメリカの農村のラディカリズムについてざっと歴史的なおさらいをしてから、おもむろに STFU の話をするのですが、STFU は 1934 年 7 月 16 日に、アーカンソー州で白人 11 人、黒人 7 人の人々によって創設されました。ミッチェルは、そのときに、アメリカで黒人だけの団体が多く迎った過酷な運命にふれて、

<ミッチェル>

団体を存続させるには、黒人だけの組織は白人社会から排除されやすく、長続きしない、という経験から両人種の組織としなくてはならなかったのだと説明します。そこで、STFU は、白人と黒人を支部を分けたりせず、同時に同じ組織に組み込む形で成立しました。ミッチェルはその話をした後、当時の映画を見せます。March of Time という大恐慌時代のアメリカおよび世界のテーマ別のドキュメンタリー風の映画です。「風の」というわけは、必ずしも実写のみでなく、ところどころに「創作」が入ることがあったからです。南部の綿作を扱ったこのフィルムでも、地主が小作人に向かって「おまえたちがちゃんと暮らせるのもわれわれ地主のおかげだよな」と話す場面がありますが、これは、ミッチェルによると、この地主も STFU の組合員が演じたのだということでした。ともあれ、この映画は最初、アメリカの綿花農業が直面している危機の状況、綿花の過剰について説明します。その後、南部の地主小作関係に立ち入るわけです。やがて、STFU という組織が出現して、ストライキの呼びかけに小作人たちが仕事をやめて行進に加わるということも含めて、状況が語られます。

ミッチェルの講演はほぼ全体で1時間くらいで、あとは質疑応答になります。

それで、この南部小作農組合というのがどのようなものであったか、ということですが、アメリカの多くの自発的な団体、草の根の団体と同じように、それほど緊密な、硬い組織ではなかったのです。やる事がなくなれば、メンバーはみんな逃げていってしまいます。ただ、このときになぜこの団体が重要な役割を果たすことができたか、といいますと、ある切迫した事情のもとに小作人たちが置かれたためであったのです。このことの理解のためには、綿花の栽培歴について知っておく必要があります。

綿花は1年草ですから、3月から4月にかけて種をまきます。6月頃になると、発芽した綿花の幼い苗と雑草とで畑はいっぱいになります。そこで、cotton chopping という、苗の間引き、除草、中耕を農作業としてするわけです。これが綿花栽培にとっての最初の労働力需要のピークの時期です。その後しばらくして9月になると、収穫の時期となります。綿の実が熟するのは、地域によってばらつきがあります。遅いところは11月になることもあります。ただ、いったん熟したらさっさと摘ま

ないと雨などによってすぐに腐ってしまうのです。こうして、綿摘みの時期はそれこそ猫の手も借りたい猛烈な労働力需要の高まる時期となります。たとえば、あるプランテーションがふだん10家族のシェアロッパーを抱えていたとしても、綿摘みの時期にはそれでは足りなくなるのです。そこで、この時期になると、プランテーションのある地域では、プランターが手配したトラックが朝一番に近隣の町に行きまして、町にいる黒人を片っ端からトラックに乗せて農場に運ぶことになります。農場にいる子どもも動員される。よく、写真集などを見ますと、幼い子どもが長さにして1.5メートルくらいの麻でできた袋を引きずって綿摘みをする姿が見られます。手袋などしないで綿を摘むので、手はたぶん血だらけになってしまいます。そして、麻から夕方、場合によっては夜まで畑で働くこととなります。

綿摘みが終わると、栽培歴1年の終わりで精算の時期になります。シェア cropping 制とは基本的に1年の契約なので、マイナス<sup>9)</sup>が出たときには、つまり、小作人が負債を負うような場合には、たいてい、小作人は別のところのプランターに、その借金を肩代わりしてもらって、新しい地主のところへ働くのです。この場合、小作人は借金を背負ったままで次年度を迎えることとなります。したがって、11月から3月くらいまではいわば農閑期となります。農閑期は通常でも人の移動が起きるわけですが、とくに大恐慌が起きてからは移動が激しくなりました。

### 小作人の追い出しと STFU 結成

ここで、ニューディールが問題となります。ニューディールの農業政策は、綿花についても、過剰生産が問題の根源という認識ですから、減反をしてもらい、減反をした程度に応じて交付金を政府が支払うしくみです。中西部のように、とうもろこしや小麦作の農家ですと、たいていは家族農業ですから、減反交付金はその家族のところに支払われて、いわば、何の問題も発生しない。ところが、南部の綿作プランテーションでは、交付金はとりあえず地主の側に支払われて、地主から減反面積に応じて小作人に交付金の一部が支払われる建前です。この場合、もしもプランターが小作人を減らすと、彼は交付金を独り占めできるわけです。じっさい、農業調整法 (AAA) が開始された1933年の冬以降、小作人がプランテーションから追い出される事例が急増するのです。これは、農閑期に発生します。1月、2月の南部の気候はどんなか。これは相当に寒いので、零下になることもめずらしくないのです。そして、この追い出しというのは、解雇とはちがうので、具体的に住居(小屋)のあるプランテーションから追い出される、寒空に投げ出されるということです。追い出された人々は、着の身着のまま20人、30人のグループでたいていは道路沿いの脇道や広場みたいなところにテントを張って寒さと飢えをしのがなければならない。これは、大問題となります。で、この、追い出された人々の一部が、このままではしょうがないから、組合でも作ろうじやな

---

\*9 通常小作人が現金を手にするのは、秋の精算の時期なので、多くの小作人は春の植え付けの時期にはたいてい現金を切らしており、そのため、生活費や種子・肥料の購入のために、小作人はプランターやそこへの出入りの商人から借金をします。これは前貸しと呼ばれ、シェア cropping 制の場合には、秋に現金化されたシェアロッパーの綿売上金の半分が小作人の取り分となるのですが、そこからさらに、借金をした金額と利子(通常年20～30%)が差し引かれて小作人の取り分となるわけです。

いか、ということになったのです。目的は、連邦政府に対してこの事態の責任を問い、施策を要求する、いま一つは、地主プランターに対して、非人間的なことをやめて、きちんと小作人を雇え、ということをお願いしていきことになりました。

STFU は、小作契約を文書化して小作人の権利義務を明記する、法律闘争みたいなことも追求しますが、最初に全国的に注目されたのは、1935 年の、綿花の収穫期に行われた綿摘みストライキでした。これは、綿摘みの賃金を引き上げさせようということで提起されました。この時期はまだ、地主側の迎撃態勢といえますか、そのようなものも不十分で、ビラを撒いてストライキを呼びかけたところ、多くの労働者が共鳴して、地主が多少の譲歩をして、賃金がじっさいに上がったのです。当時、綿摘みの一日の賃金は 50 セントくらいだったのが、75 セントから場合によっては 1 ドルくらいにまで引き上げられました。このようにして、1936 年では、STFU は、アーカンソー、ミシシッピ州などを中心におよそ 3 万人くらいの組合員を抱えていたのです。



ここで、少し、お配りした写真に関連したことを申し上げておきます。タイロンザ(Tyronza)、pop 601 とあるのは、STFU 発祥の地で、アーカンソー州の北の方にあります。私が訪れたときには人口 601 人だったということです。この道を少し行った左側に、ミッチェルがやっていたクリーニング店と隣のイースト(Clay East)がやっていたガソリンスタンドがあったはずですが、このあたりは、赤の広場と呼ばれていたとか、言われています。ちなみに、イーストはこの町の保安官もやっていたことがあるので、組合活

#### <タイロンザ>

動には初期には好都合だったそうです。ミシシッピ川の東側にはかの有名なメンフィスがあります。ここは、STFU がアーカンソー州での活動が危なくなって後に、本部を置いたところです。一般には、エルビス・プレスリーの博物館があるところとして知られています。そこから少し南下すると、オクスフォードという町になり、これは、アメリカ文学史のほうで有名なウィリアム・フォークナーのふるさとです。ミシシッピ川の西をどんどん行くと、州の首都のリトルロックで、ビル・クリントンが知事をやっていたところであり、現在はクリントン図書館があります。ミシシッピ川を南下して、クラークスデールという町に着きますが、ここは、STFU 関連の人々が協同農場を創設した場所に近くなります。さらに南下すると、ヴィックスバーグという南北戦争の古戦場、その南にナचेズ(Natchez)という名前の、南北戦争前の奴隷制時代のプランターの邸宅が多くあり、中を見ることができます。当時の衣装をまとった女性たちが迎えてくれるのです。

さて、STFU のほうは、1936 年には先の cotton chopping の時期にふたたびストライキを構えました。しかしながら、このときには地主側は対抗のための「準備」を整えておりまして、暴力事件も相当数起きました。ストライキとしては失敗だったと見られます。

私はまだ留学しないうちから STFU の文書集(当時"Archives of Rural Poor"と呼ばれていました)(STFU Papers)にアクセスすることができました。関東学院大学の図書館が余った予算で 200 万円ほどしたこの(60 リール)マイクロフィルム・コレクションを購入してくれたのです。翌年、アメリカ社会党文書(Socialist Party of America Papers)も購入されました。これらの資料を用いていくつかの論文を書きました。それらの研究の中から STFU の理想とした農業改革の方向、そしてそれとの関連で構想され、実践された協同農場運動について知りたいという気持ちが強くな



り、アメリカ留学を計画したのです。グラブス教授から始まった人的関係のなかから、ノース・カロライナ大学チャペル・ヒル校歴史学部のティンダル(George B. Tindall, 1921-2006)教授につくのがいいと考えまして、彼の受け入れを条件にフルブライト委員会とアメリカ学術評議会(ACLS)とに願書を出し、1977-78年の留学が決まりました。

## デルタ協同農場



<ティンダル教授>

ンテーションから追い出されて行き場のなかった黒人と白人のシェアロッパーたちを入植させる形で創設されました。購入したのは、フランクリンと懇意であった YMCA の全国書記であり、社会運動家のシャーウッド・エディ(Sherwood Eddy, 1871-1963)です。

この農場は組織原理として、生産者協同組合と消費者協同組合を根幹とし、前者においては、計画にもとづいた労働の組織と分配が行われ、社会主義的な労働に応じた報酬を理想としていました。しかしながら、この農場の主生産物は当時過剰生産が問題視されていた綿花であり、農場を構成する小作人からすれば、現金の不足を補うために当初から前渡しされていた給付金があったかもそれ自体賃金のように見えましたし、農場の購入代金を売上金のなかから返済していくというプランは農場経営に緊張を強いたのです。農場は当初から赤字に見舞われ、経営は苦しかったのですが、全国から寄せられる少額の寄付金が相当額になったために、それを繰り入れることで破産を免れていました。この寄付金が集まったことは、いわば、アメリカ特有のボランティアズムに依拠している面があります。先の STFU 運動自体がそうでしたが、10ドル、20ドルとい



<フランクリン>

った献金が小切手の形で本部に全国から送られてくるのです。デルタ協同農場の場合もそうでし

\*10 "Delta and Providence farms papers, 1925-1963," in Manuscripts Department, Southern Historical Collection, University of North Carolina Library.

\*11 Arthur F. Raper, *Japanese Village in Transition*. Tokyo, GHQ-SCAP.

た。

ただ、たとえば、アーカンソー州ダイス(上記のタイロンザに近い)に設営された連邦政府直営のダイス・コロニーなどと比較すると、ダイスは経営は当初から家族単位の小農場の集合体にすぎず、また、その農場の周辺が黒人人口が多かったにもかかわらず、白人のみを構成員としたといった特徴がありました。デルタ農場は白人、黒人農民が同等の資格で経営に参画し、さらに、のちに設立された、第2農場(プロビデンス協同農場)は、第二次大戦後になっても信用協同組合と地域図書館、地域医療施設などが近隣住民に開放され、南部にその後多く設立された地域事業のプロトタイプとなったとも思われます。

ところで、第2農場は、1956年に閉鎖されています。この閉鎖にかかわる経緯が戦後南部史の困難性を象徴しています。1954年に連邦最高裁で白人と黒人の公立学校における分離教育を違憲とする判決(ブラウン判決)が出されたのですが、これは画期的な判断で、それまでの「分離すれども平等」とする1896年の判決(プレッシー対ファーガソン)を覆したのです。この判決に真っ先に反応したのは、南部の人種融合反対派の人々です。ミシシッピ州ではかつてのキュー・クラックス・クランを連想させる「白人市民評議会」があちこちに結成され、連邦政府による共学の押しつけはさせない、などの方針で活動を展開していきます。農場内部の白人と黒人の融合が当たり前だったこの農場が槍玉に挙げられたのです。

STFU 運動には、ミッチェル以外にアメリカ社会党の立場から、また福音派(Social Gospel)の牧師の立場から STFU に支援をしていたハワード・ケスター(Howard Kester, 1904-1977)という人がいました。ケスターは1936年に『シェアクロッパーの叛乱』(*Revolt among the Sharecroppers*)<sup>\*12</sup>という STFU の初期の活動を生々しく伝えてくれるドキュメント風の書物を著しています。ちなみに、ミッチェルは *Mean Things Happening in this Land*<sup>\*13</sup> という自伝を書いています。ケスターは、1957年に南部の人種問題に対してキリスト教がどのような役割を果たせるか、について議論する聖職者の会議をナッシュビルで開いた。そのときのメイン・スピーカーの1人がかの有名なキング牧師(Martin Luther King, Jr.)だったのです。この会議は、1930年代の南部の運動をクリスチャンの立場からリードしたエリートであるケスターが、1960年代の公民権運動の指導者になっていくキングとの接点にいたことを示す事例で、興味深いのです。ちなみに、モントゴメリーのバスボイコットの主役となったローザ・パークスという女性は、その前に、テネシー州にあった労働学校のようなハイランダー・フォーク・スクールの夏季セミナーに出席したことがありました。

私はその後、デルタ協同農場についての論文を『歴史学研究』に載せました<sup>\*14</sup>。また、その後、当時横浜国立大学におられたフランス経済史の遠藤輝明先生の科研費グループで本を出すについて、私は「ニューディール政策形成と民衆の論理」という章を書きましたが、そのとき、大恐慌時代の連邦議会議事録に目を通しました。そうした作業のなかで気づいたのは、議会に限らず、アメリカの農民団体、農業雑誌、新聞、その他で主張されているのが、インフレーションを起こ

\*12 Howard Kester, *Revolt among the Sharecroppers*, NY, Covici • Friede, Pub.1936.

\*13 H.L. Mitchell, *Mean Things Happening in This Land: The life and times of H.L. Mitchell, Cofounder of the Southern Tenant Farmers Union*, Allanheld, Osmun, Montclair, NJ. 1979.

\*14 秋元「1930年代アメリカ南部における協同農場運動の軌跡--デルタ/プロヴィデンス協同農場,1936～1956年」『歴史学研究』第504号(1982年5月), pp. 1-16,67.

せという主張だということでした。アメリカ史のなかではすでにポピュリスト運動のときに金銀複本位制という形でインフレーション要求が出ていますが、このように、農民がインフレーション要求をするというのは、ほかの国にないアメリカの特色なのです。大恐慌時代にはフーヴァー政権下でそれはすでに奔流ようになっていました。ところが、フーヴァーはインフレは大嫌いです。ニューディールは金本位制廃止から始まってドルの価値を下げる方向、つまりインフレーションの方向へと舵を切りますが、それはまさしく、大恐慌下に現れた民意に対してローズヴェルト政権が応えた結果に他ならなかったのです。

アメリカ経済史を通観してみれば、なぜインフレーションか、ということはおおよそ見当がつくだろうと思います。インフレーション(簡単に言うと物価の上昇)は、債務者の債務を軽減します。債務者の「代表」が、借金で機械を買い、設備を更新する農民たちです。大恐慌下でいちばん大きな問題となったのは、物価の限りないと見られた下落です。この下落を阻止するには、意識的にインフレーションを起こすしかない、と考えられたのです。当時、それはアーヴィング・フィッシャーによって「リフレーション」と呼ばれました。

### ケインズ経済学への歩み

ニューディールが物価引き上げ政策によって恐慌脱出の手がかりをつかむと、こんどは、大資本家や大農場主ばかりがいい目を見ているのではないか、もっと底辺の労働者や下層農民の暮らしを良くしてもらいたいという主張がしだいに強くなってきます。STFU がそうですし、中西部には労農ラディカリズムが台頭しました。都会では労働運動も非常に盛んになります。こうして、ニューディールの次のフェイズ、つまり、国民所得の再分配が舞台の中心に現れてきます。分配の問題は、1930年代を通じて底流のようにエリートや大衆を動かしていきます。中から下の労働者・農民の暮らしを良くすることこそが、彼らに対する購買力付与を通じて国民経済自体を改善していくのだ、というわけです。このことは、最終的には経済学の変容をも促していきます。生産に目を据えた古典派経済学から需要面を重視するケインズ経済学への主役交代です。ケインズ経済学が福祉国家的な再分配を重視することから、財政赤字やインフレーションを恐れない、もっと言えば、インフレーションと親和的である事情もおわかりいただけるかと思います。

それと無視できないのは、1960年代においていわゆる公民権運動が南部で燃えさかっていたときに、連邦政府がこの運動に対していろいろな形で実質的なバックアップをしたことが、運動成功の1つの鍵となったことです。司法長官だったロバート・ケネディは、北部から南部へのバス等によるフリーダムライドに対して、バス乗車がうまくいきそうもないとわかると、特別機をチャーターして運動を支えたのです。1930年代の時にも、むろん、減反交付金は問題を引き起こしましたが、それ以外のいろいろな点で、政府は下層農民やその団体にきちんと対応しました。また、大統領夫人のエレノア・ローズヴェルトは、貧困者に対して目に見える形で支援を行いました。

STFU がどのような遺産を具体的に残しているかについて、少しふれますと、南部史学会(Southern Historical Association)は、だいぶ前から H.L.ミッチェル賞というのを設けて、2年に1

回、南部の労働者、農民、その他の歴史についての優れた業績を表彰しています\*15。それから、STFU 発祥の地であるアーカンソー州タイロンザには、例のクリーニング店とガソリンスタンドのあったところに STFU 博物館が 2006 年に開館し、半日くらい開館しているようです。

われわれは現在の時代について起きていることについては、ほとんど予測する能力を持ちません。来年アメリカ大統領がだれになるかとか、イラク戦争がどうなるかは、わからないわけです。しかしながら、歴史においてはすべてが完結して、すでに結論が出ているわけです。したがって、われわれは歴史を研究することによって物事の因果関係を学ぶことができるし、そこから現代の諸事象に対して教訓を引き出すこともできます。逆に、歴史を軽視したり、学ぶことをやめてしまうと、歴史によって復讐されることになります。きょうお話ししたアメリカの歴史についての一断片は、アメリカ史全体を本にたとえれば、一節に過ぎないのですが、外側から見た、いわば常識的なアメリカの歴史にじつはふつうの人々が深くかかわっていたのだということをおわかりいただければ幸いです。

ご静聴ありがとうございました。



<アーサー・レイパー>



<ナチェズの南北戦争前の邸宅ツアー>



<ノース・カロライナ大学>

---

\*15 <http://www.uga.edu/sha/awards/mitchell.htm>